

ネパールの眼科医療

黒住 格

〔ネパールの概況〕

ネパールは、面積約14万平方キロで、北海道の2倍の広さをもつ王国である。南は、テライ地域と呼ばれる標高100メートルの平原が続いてインド国境に接し、北は世界の屋根ヒマラヤに至る亜熱帯から寒帯に亘る国で、総人口は約1100万人である。最近まで、テライはジャングルとマハリ の巣であったため、人々はマハリヤのいない4000フィート以上の山地にしがみついて農業を営んでいた。最近になって、国連等の援助で国土の約80%からマハリヤをしめ出し、人々の生活が、除々に山地から農業に適したテライに移ろうとしている。

しかし、ネパールは鉱産資源に恵まれず、外国援助による以外は目立った工業もなく、農産物にも乏しく、交通の便が悪い上に、国民の90%近くが文盲と言われる文化水準の低さが加わって、国民の生活水準は極度に低い。このことは、国民1人の年間総収入が邦貨にして2万5千円にしかならぬことでも分かる。このような生活環境であるから、全国民がすべて公衆衛生の潜在患者と言っても言いすぎではない。従って栄養失調、貧血、結核をはじめとするあらゆる疾病の巣窟でもある。

〔ネパールの医療情況〕

この国の医療事情は非常に悪い。ネパールには医科大学がないため、医師になろうとする者はインドその他の大学で医学教育を受けねばならない。現在ネパール全国には、こうして医師になったネパール人医師約250人と、世界各国からのキリスト教関係の医師数十名がいるだけである。これだけの医師の数では、全人口をカバーすることはとうてい不可能であるので、ネパールでは、首都カトマンズで2年間の医療訓練機関を設け、ここを卒業した者をオグシリアリヘルスワーカーと呼ばれる医療士に仕立て、地方の先端医療機関であるヘルスポストに配属している。しかし、この医療士の数もヘルスポストの数もまだまだ不足している。その上、医療設備も薬品も極度に不足しているから、首都の一流病院においても満足のいく医療は望めない。

〔ネパールの眼疾患と眼科医療〕

眼科の医療を眺めると、これも一般医療の縮図でしかない。ネパールの国立中央病院であるビル病院の統計によると、主な眼疾患は、白内障、角膜潰瘍による眼感染症、緑内障、虹彩毛様体炎、角膜軟化症等である。一番多いに違いないと考えていたトラコーマは殆んどないと言うことであるし、私が診た患者の中にも、1人の患者もいなかった。失明の最大の原因は白内障であり、手術可能な白内障による患者は全国で約4万人と推定されている。

一方、眼科医の数は全国でわずかに6名である。そのうち、インドの医科大学を卒業して更にロンドン留学から帰った上級眼科医は8名、インドの医科大学を卒業して、イギリス、アメリカ等における再研修の機会を待っている初級眼科医が8名である。このうち、上級医3名と初級医1名は、首都カトマンズのビル病院と陸軍病院にいて、第2の都市ピラトナガル市の病院と、第3の都市ビルガンジ市の病院に、それぞれ初級眼科医師1名が配属されている。

ネパールの眼科医療の設備もまたきわめて貧弱で、ネパール第1の大病院で400床をもち、眼科医8名をかかえるビル病院でも、細隙顕微鏡1台、視力表1台の他には検査設備は何もない。日本の小病院、小医院の眼科にもはるかに及ばないものである。地方都市の眼科にいたっては、4m×4mの外來診察室に、眼底をのぞく直像鏡1本をもった前時代的な診察をおこなっている。もっとも、ネパールの患者は、検眼鏡1本でも診断のつくような、はっきりした症状をもったものがやってくる。従って、ネパールの眼科は、病因を哲学的に考究する診断学ではなくて、実践的な治療が主眼になっている。治療と言っても、簡単な治療薬しかもたず、抗生物質などの高価薬は患者自身に市場から買ってくるように指示を与えるだけであるから、医師のおこなり眼科治療は、手術が主眼となる。ビル病院の眼科の活動状況を見ると、昨年1年に扱った外來患者の新患は1万人余、手術をおこなった患者を病名別に眺めると、白内障262眼、先天性白内障12眼、緑内障18眼、感染及び腫瘍による眼球摘出18眼、涙嚢鼻腔吻合術12眼、外傷による角膜縫合6眼等が主なものである。このうち、老人性及び先天性の白内障合計274眼が圧倒的に多く、ネパールでの眼科の、白内障手術の重要性がうかがわれる。

ビル病院の上級眼科医たちが、安定した手術で白内障手術を行う一方、初級眼科医のうちには、まだ簡単な眼手術も行いえず、却って外科医が両眼の失明者に限って白内障手術を行うと言っていたところもあった。眼科医のいるところはそれでも役不足ながら恵まれているのであり、これら三都市以外の町や村では眼科医療には全く恵まれない日々を送っている。このことを多少でも緩和する目的をもって、もう一つには地方の外科医に眼科医療を教えることを目的として、年に1回、全

国の眼科医を動員して、地方の病院、地方の学校等にキャンプを張って眼科の治療を行う移動眼科診療隊なるものを作って、診療の実をあげている。これをおこなうに当っては、前もってラジオ等で情報を流しておくのであるが、歩き通して10日もかかる山の中から診療隊の治療をうけに来るということで、1カ所に1週間滞在して、およそ300人の開眼手術を行うと言っている。このようなキャンプが1カ月間おこなわれると言っている。

この他に、古くからインドで用いられて来た、針で白濁した水晶体を眼球内につきおとして開眼させる手術が、地方では今でもおこなわれていると言っている。この方法は、合併症をおこして早晚治療不能な失明に陥ると考えられ、先進国ではもうおこなわれていないが、先般、ネパールの移動診療隊に加わってネパール奥地の診療をして来た奈良医大名誉教授の神谷氏の報告によると合併症もおこさず視力を保っているものも多いと言っている。

兵庫医科大学眼科講師
東南アジア眼科医療協力会員